

「男女共同参画フォーラムin大分」 ～医師確保のための職場環境を考える～報告

大分県医師会男女共同参画委員会委員長 谷口 邦子

「男女共同参画フォーラムin大分」は日本医師会の後援を受けて平成25年12月7日(土)15時より大分県医師会館にて開催された。コメディカル13名を含む30名が参加した。県からは医療政策課の堤健一課長以下3名、大分合同新聞の記者も参加した。

最初に谷口より「男女共同参画フォーラムin大分」開催のいきさつと、昨年行った「職場環境アンケート調査」結果の説明があった。アンケートについては既に関係医療機関には配布しているが、ホームページ公開には同意が得られなかったので一部掲載する。

「職場アンケート調査」〈平成24年7月実施〉結果より抜粋

10. 産休・育休・介護休暇を取得しやすい工夫

「勤務体制」については就業規則で示している施設もあり、申し出があれば可能な施設も多い。「短期正職員制度」や「非常勤」など個人に適したプランが用意され、勤務形態の変更を認める施設もある。

「周りのサポート」については「他の医師」や医局などからの「代替要員」、「複数主治医制」「ワークシェア」など臨機応変に対応している様子がみられた。

12. 勤務医の職場環境

「勤務体制」については「勤務形態の柔軟性」「時間外・夜間・休日当直を減らす」というのが多くみられ、「休暇」では「有給休暇の取得」以外にも「リフレッシュ休暇」「夏季休暇」3歳未満の子の「看護休暇」などがあげられた。「手当」についても「育児手当」「助成金」「分娩・救急勤務医・新生児担当手当」などが支給されている。

「職場環境」については「当直室の設備の充実」「全医師に個室の確保」「住宅の確保」などが実施されている。

「精神的サポート」として「医師間・各科・世代の連携」「医師を大切に」「夜間のコンビニ受診抑制」「健康ストレッチング」などがあった。

「業務サポート」として「医療事務作業補助者」「外来及び病棟クラーク」の確保、「各技師による診療補助」「ペア制・バックアップ体制」「週休2日制」「院内外、県内外、国内外研修の実施」「医師勤務軽減委員会の設置」などがあげられている。

以上のように今回のアンケート調査で、大分県においても徐々ではあるが、医師の環境改善に向けて医療機関における意識改革、制度・設備の充実が進んでいることが伺えた。当事者である女性医師や研修医にも研修会での意識改革などを啓発しているが、加えて医療機関の協力が得られることは心強い次第である。今回のアンケート結果を参考に医療機関の特性に合った対応が求められるものと思う。

続いて三倉剛大分県医師会常任理事（男女共同参画委員会委員）の司会で、管理者の立場から2名、女性医師の立場から2名の計4名のシンポジストから発表があった。

1) 田代英哉先生（大分県立病院院長）

大分県立病院の概要についての説明があり、医師数119名中女性医師が22名（うち子育て中が2名）ということであった。女性医師は20代が27%、30代と合わせると77%である。

さらに2名の女性医師にメールで個別に意見を聞いたところ、「院内保育所が助かる」「診療科が複数体制なのがいい」反面「周囲に気を使う」「仕事が多い」など挙げられた。また「職場や家族の協力が必要」「病児保育が助かる」「モデルとなる女性医師がいない」等の意見もあった。

県立病院では「院内保育園」「病児保育」が実施されており、非常勤医師も産休や育休を確保できるようである。

2) 安田正之先生（臼杵市医師会立コスモス病院院長）

初めにコスモス病院の概要の説明があった。

医師や看護師の確保について、大分市から離れていること、医師会立であるが故に地元で看護師を探すと会員と競合することになるという地域の悩みを話された。さらに麻酔科や整形外科の医師の確保が難しく、整形外科の患者は高齢者が多いので内科の医師で対応できないかとか、急患時には当直医が対応するという工夫を話された。

また子育てについても保育園を卒業後の学童の時期の問題があり、急な発熱や休校、介護の問題なども挙げられている。

ここでも医師の「地域の偏在」「診療科の偏在」が伺われた。



話し合う県内の病院の院長や女性医師ら

女性医師が働きやすい職場に

大分市で男女共同参画フォーラム

大分県医師会（近藤稔会長）は7日、県医師会館で、「男女共同参画フォーラム in 大分」医師確保のための職場環境を考える」を開いた。

県内の病院の院長2人と女性医師2人が講演した。

パネルディスカッションにも講演者4人が参加。「今の病院の仕組みは男性医師社会の考えでつくられているので、女性医師を活用するには、女性の要望を聞きながら柔軟に対応が必要がある」「育児や介護が必要な場合の勤務時間の短縮や当直勤務の免除などを導入する場合は、周りの理解が必要で、管理者がきちんと説明していくことが必要になる」などの意見が出た。

大分合同新聞 2013年12月21日(土) 朝刊17面

3) 油布文枝先生（新日鐵住金(株)大分製鉄所産業医）

大学院の時期に2人のお子さんを出産し，その後復帰して「当直・オンコールはなし」「半日勤務」など個人的に医局に条件を認めてもらった。その後産業医（非常勤），大分大学の健康管理センター（日勤のみ），産業医（常勤）と仕事を続けているが，産業医については人づてに就職した。土日休みで，17時までの勤務である。

4) 豊田美夏先生（大分県地域成人病検診センター内科医師）

卒業後5年間臨床に携わったが，体調を崩し，あっせん会社を通じて検診センターを紹介してもらった。週4日半日の勤務である。その間に趣味など自分の自由な時間が持てる。

検診センターには現在常勤医師4名の他，既婚・子育て中の女性の非常勤医師が10名いて常勤を支えている。

その後フロアからの意見で，「女性が今ある枠に自分を当てはめるのではなく，自らが求めるべきだ」「女性医師の優遇に対して男性医師はどう思っているか」「待遇面の問題」，さらに堤課長から「大分大学の地域枠が育っていて平成35年には30～40名になる」「県のドクターバンクは県外からの求職者を対象にしている」「地域医療支援センターではまだ復職支援までは取組んでいない」等の説明があった。終了後，簡単な茶話会が開かれ，意見の交換がなされ，18時頃散会した。

